

## 独自の視点で深く考え抜いて、周囲から信頼される医師に

公立学校共済組合九州中央病院呼吸器内科部長 古藤 洋

### 違う選択肢に思いを残し医師の道へ

出身は九州最北端の玄界灘にある対馬です。なかでも私の生まれ育った上対馬は海峡を挟んで朝鮮半島に近く、晴れ渡った日には山の上から釜山がみえることもあります。小さい頃、私は体が弱く、幼稚園帰りに病院に寄って診察や投薬を受けることもしばしばでした。病院には幼児期から馴染んでいたわけですし、町立病院に勤務する医師の姿を最も身近に感じる専門職と捉えていたのかもしれない。幼児期の私は「将来はお医者さんになろうかな」という時期もあるようです。

中学卒業後は実家を離れて長崎市の高校に進学し、下宿生活を送りながら大学受験を目指すことになりました。

本来私は数学や物理が好きで、小学校入学以降は一貫して理学部に進学しようと考えていました。ところが高校三年生の夏休みに帰省し、ふと「医学部もいいかもしれない」と口走ったところ父が予想外に喜んだのです。普段から私の意思を尊重して進路には一切口を挟まなかった父の希望を初めて知り、田舎に生まれた私に教育を受ける機会を十分に与えてくれたことへの感謝もあって医学部に進みました。

その後、研修医2年目の終了を控えて理学部再受験を考えたことがあります。当時は子どもが生まれた直後だったこともあり実行には至りませんでした。そのことを後悔はしていませんが、「あの時にもしも再受験していたら……」と振り返る

ことはありますね。

### 呼吸器診療の 目覚ましい進歩を経験する

1984年に九州大学医学部を卒業し、九州大学医学部胸部疾患研究施設(以下、九大胸研)に入局しました。割と曖昧な動機で学部を選んだ大学受験の時とは違い、呼吸器科入局を決めたのには明確な理由がありました。ベッドサイドティーチングで麻酔科を回った際にレポート課題として「肺胞気式の導出」を指定され、名著と定評のあるComroe先生の呼吸生理学の教科書(The Lung)を読んだのです。これが非常に面白く、呼吸生理学を学びたいと強く思いました。麻酔科に入局するという選択肢もありましたが、患者さんが社会復帰するまでを含めてトータルで診たいという考えがあり、呼吸器専門医となる道を選びます。

私が医師となってから呼吸器領域の進歩には目覚ましいものがあり、次々と新しい波が押し寄せてきました。私自身も1980年代終わりと2000年代初めの2回、医局から福岡病院に出張して、喘息治療における大きなブレイクスルーを実感しました。

入局した当時、喘息は気道の慢性炎症性疾患であるとする概念が確立されつつあり、治療の中心は気管支拡張薬からICS(吸入ステロイド薬)を用いた抗炎症治療へ移行する過渡期でした。しかしICSはなかなか臨床には浸透せず、1990年頃まで患者さんは夜間に発作が起きれば救急外来で点